

黒川 清 著

SHORT SEMINARS 水・電解質と酸塩基平衡

— Step by Step で考える (改訂第2版)

B6判 226頁 定価2,940円(本体2,800円+税5%), 2004年, 南江堂発行

私は肝臓外科を専門としている。肝臓は代謝の中核であり、水・電解質や酸塩基平衡に異常をきたすことが多い。門脈亢進症による水やNaの貯留、それに対応するための利尿薬使用によるためである。また移植では、免疫抑制薬、抗ウイルス薬など多数の薬剤による腎障害や移植片からの多量のリンパ液の漏出による水・電解質の異常が起る。とくに生体肝移植後はグラフトが小さいことやout flow blockのために多量の胸腹水がみられ、ときには1日で体重と同じ重量に達することがある。したがって、数時間ごとに流出した胸腹水の量、電解質、蛋白の量を測定して輸液による補正を行わなければならない。尿の電解質とpH、動脈血のBEや HCO_3^- も重要な輸液の指標となる。さらに管理をむずかしくするのは胸腹水がドレーンから一定して出てくれないこと、すなわち体腔の一部に貯留することによる循環血液量の過不足と水・電解質のアンバランスに常に注意が必要なことである。したがって、若い医師には水・電解質管理の第一歩として尿や体液の、また輸注するすべての液の1滴にいたるまで正確に計算するように指導している。

以上のような環境にあるので、外科医としては、水・電解質と酸塩基平衡についてよく知っているほうだと自負している。しかし臨床はそれほど甘いものではない。とくに移植は多数のファクターが関与するので、いったい何が起っているのかわからなくなるときがある。そうしたときには本書の中にある電解質と酸塩基平衡のフローチャートをもう一度みて考えなおしている。意外な見落としに気づき、輸液の方針をかえることで何度も助けられた。黒川清先生に感謝!

私は初版が発行されたときに本書をいただいたが、そのときは一気に読んだ。それで頭の中がたいへん整理された。しかし人間は「かなしいかな」忘れるのである。したがって、一度読んでも本書を手離すことはできないのである。若い研修医の先生は1日10頁ずつ読みすすみ、原理を理解するのももちろん、フローチャートにいたるまで暗記する必要がある。さらに3~4回この作業を繰り返す。そうするとおおかたのことが頭にはいるので、本書を買った方は必ずそこまで行っていただきたい。本書の特徴は、余計なことが書かれていないこと、また本書の内容を理解したかどうか「分析のすすめ方」、それに続いて「応用問題演習」があるので自己診断できるのも特徴である。

私の医局員には初版に続いてまた買うように推奨している。回避しうる術死、入院死を減らすには本書が必要だからである。

〔東京大学肝胆膵・人工臓器移植外科教授 幕内雅敏〕

